



キトラ古墳全景（南から）

墓道を確認しました。盗掘坑の規模は、調査区北壁で東西幅約 3 m、深さ 1.5 m が、出土しました。

横口式石槨の南に位置する墓道は、古墳の墳丘盛土から掘り込まれ、幅約 2.5 m、調査区北辺での深さは 1.5 m。東側で 3.5 m の長さが残っていました。墓道の床面は、最も高い北側 0.3 m だけがほぼ水平で、それから南側は緩く南に傾斜します。墓道の下部は、堅い版築土で埋められていました。墓道の床面には、南北方向のコロのレール痕跡がみつかりました。埋土から土器片が出土しましたが時期は特定できません。
（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

中国社会科学院考古研究所との共同研究 （唐長安城の太液池の調査）

昨年 8 月、新たな 5 年間の共同研究に調印して以来、研究員交流や秋期事前調査を経て本年 4 月 10 日より 4 月 28 日までの 18 日間、奈文研から 4 名の調査員を派遣しました。調査対象地は、中国西安市内の唐長安城東北部分にあたる大明宮の太液池です。ちょうど池の西岸に当たる場所を昨秋の事前調査に引き続き、調査面積を拡張して東西約 95m 南北約 47 m の約 4500 m² を調査しています。

今回は、昨秋の調査時に設置した測量基準点を使用して、中国国内座標に合わせて測量、現地の技師とともに精密な図面を作成する作業をおこないました。また、詳細な記録をとるため 4 × 5 インチ判の



現地での測量風景

カメラを使用した遺構写真撮影も同時におこないました。

現地ではちょうど春先の黄砂現象がピークに達しており、調査員一同ほぼ毎日吹き荒れる砂嵐との戦いを余儀なくされ、調査終了時にはほとんど現地の方と見分けがつかなくなるほど中国の風土にとけ込んでいました。調査後半には町田章所長をはじめとする一行が、北京の研究所を経て視察に赴き、今後の調査に関する打ち合わせなどをおこないました。

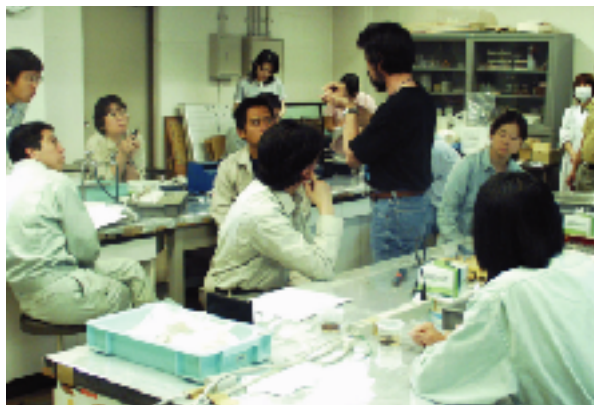
（平城宮跡発掘調査部）

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「保存科学課程」

今年度の「保存科学課程」は、5 月 21 日から 6 月 5 日まで実施し研修生は 10 名と例年に比べ少ない人数でしたが、少人数ゆえに密度の濃い研修をおこなうことができました。現場での応急処置、一時保管、事前調査、保存処理、保管・展示など遺物を保存するにあたって重要となる内容について講義、実験、実習をおこないました。2 週間という短い期間では、様々な遺物の保存についての知識と技術をマスターすることはなかなか難しいことですが、基本的なことをひと通りこなすことで、保存科学に対する理解が深まったようです。

研修生の中には、今後保存処理担当者として実際に取り組んでいかなければならない方もいれば、発



金属器保存処理実習

掘現場で保存科学の知識を活かしたいという方もおり、立場はそれぞれ違っていました。今回の研修を受けることで、保存処理のマニュアル作り、外注に際して留意しなければならないこと、遺物の取り扱いなど多くの点で認識を新たにできたとの感想が寄せられました。研修生の皆さんがこの研修の成果を埋蔵文化財の保存に活用されることを期待しています。



脆弱遺物の取り上げ実習

発掘技術者専門研修「遺物撮影課程」

今年度は「遺物撮影課程」を、4月17日から24日までの短期で実施しました。応募は思いのほか多く、募集定員を遥かに超える盛況ぶりで、最終的には20名を対象としました。

この研修は、8月から9月に実施する「文化財写真課程」の期間が長過ぎて、参加したくても難しいという自治体や機関の意見に答えようというのが第一の目的でした。また昨今の発掘調査における記録の方法や報告書編集の意識を見ていると決して最良とは言いがたく、写真を通して「文化財における記録とは」ということをもう一度見つめ直す必要があり、そのためにもより多くの調査員や学芸員の方々との意見交換の機会が欲しいという思いもありまし

た。さらに、すでに文化財写真課程を受講した方々から、基礎編だけではなく応用編の機会も欲しい、という意見があり、これに対処することもひとつの目的でした。

この課程は初めて実施するというのもあって、応募者の写真技術はどの程度なのか、また考え方や意識はどうか、といろいろと不安でした。心配はほぼ適中し、文化財写真課程と同様に基礎編から始めなくては何も通じないのです。しかも文化財写真精神論からでなくては。また、写真記録法に関しても問題点が多々ありました。特に、写真の評価をしようとしなから良否の判定ができないのです。急遽2日目から応用組（3名）と基礎組（17名）とに分けて研修を実施することにしました。

結果として、我々の感想は「期間が足らん」であり、研修生は「短い」でありました。しかしたとえ短い期間であっても実施してかなりの手応えがありました。きっと研修生も「よかった」と感じてくださったことでしょう。（埋蔵文化財センター）

▲ 春期特別展示『あすか以前』

飛鳥資料館では、毎年、春と秋の2回にわたって特別展示をおこなっています。今年度、春の特別展示は、明日香村教育委員会、桜井市教育委員会、奈良教育大学の協力を得て、飛鳥地域の飛鳥時代以前の出土遺物を中心に「あすか以前」と題して、2002年4月23日～6月2日の会期で開催しました。また、この展覧会に伴い、平城宮跡発掘調査部の深澤芳樹による特別講演会「弥生時代の集落、森のムラ」を5月11日に当館の講堂にて開催しました。講演会は、多くの方にご来場いただき、大変盛況なものとなりました。

飛鳥地域は古墳時代の終末期から、ようやく成立しようとする日本という国の最初の首都として、日本史上に特別な意味を持つことになります。『日本書紀』に書きとどめられた古代の都としての「飛鳥」と、都にかかわるさまざまな遺跡は、広く世に知られ注目を集めていますが、それ以前のこの土地の歴史については、あまり話題に取り上げられることもないというのが現状です。

今回の展示は、日本史の表舞台に登場する以前の、この地域の歴史的な変遷をたどり、縄文・弥生・古